

九 自己發見の戰慄

巨萬の富と花のやうな天稟の美貌と、雪のやうな純潔な性質とを有つた、若い貴公子ドリアングレイは、あらゆる人の羨望の中心であつた。友なる一畫家は彼を敬慕するの餘り、その美を永遠に傳へやうと、心血を注いで彼の肖像を書いて居る。時偶そこへ來り會はしたのが、極端なる快樂主義の權化ヘンリイ、ワットン卿。徐に肉慾主義の快樂説を説いて「だから我等は官能を鋭く磨いて、心ゆくばかりに肉慾を享樂せねばならぬ、卿のやうな天性の麗質を具へた若人に於ては、尙更の事である」と云ひ終つて去つた。肖像は出來上つた。グレイは改めて之に打ち向ふ時、今更の如く自己の美貌に驚いた、我乍ら我とは思はれぬまでに惚々とした。ふと「この美が何時まで保たれるだらう」。こんな思が電の如く彼の胸の奥に閃いた時彼の胸は泣き出した。いまだに暗く閉ぢられる。途端ワットン卿の言は鋭い力と響とを彼に與へた。

夫已來彼の性格は一變して、全く快樂主義の人となり、肉慾の渦中に耽溺するに至つた。若い可憐な一女優を失戀の爲め悶死せしめたのを始めとし、異性に對するあらゆる慘忍な行爲をして敢て怖れなかつた。折々堪へ難い不安の念に襲はれる毎に、ワットン卿の教によつて、之を壓服し掃蕩した。あらゆる肉の香を求むる爲には、頽廢の空氣に漲つた魔窟にまで、出入するを憚らなかつたのである。

斯の如き生活を續くること十八年、彼はふとして昔の肖像畫を見る氣になつた。久しく室の片隅に片付られた肖像の覆ひがとられると等しく、憤怒と痛恨と驚愕との叫びは、彼の口から迸り出ざるを得なかつた。若々しく美しいと思ひ切つて居た肖像は、何ぞ計らん、灰色の髪に兩眼凄く光り、額や

頬には獐猛な皺が深く刻まれ、若々しい血潮は殺氣立つて滲み出て居る。とても二目と當られぬ悪魔そのまゝの姿である。これが十八年間に於ける、グレイの凄惨な實相であった。頻りに起り来る恐怖と悔恨の念は、また同時に一種の反抗の念をも喚び起して、彼を戦慄せしめた刹那「この肖像畫はおれの靈だ。おれの良心だ。さうだ、これを打ち破つてしまへばそれでよいのだ」と、いきなり彼は肖像畫目にかけて、鋭利なるナイフを取り、グザとばかり突き刺した。夜陰に響く凄惨な物音に、驅つけ来る給仕や女中、驚くまいことか、今の今まで若々しかつた、主人が、老衰した獐猛な凄惨な悪魔の相となつて、而も我と我が胸をナイフで刳つて死んで居やうとは。そして若々しい主人の肖像畫は、嘲るが如く微笑むが如く、そこに掛けられてあつた。

あはれ、ドリアン、グレイは自己の肖像の上に、凄惨な凄惨な悪魔のやうな、自己の姿を見せ付けられて戦慄せざるを得ないと共に、驚愕と恐怖と不安とは電の如く彼を襲ひ來り、これは自己の肖像でないとしら、をきる餘裕もなければ、辯護する暇もなく、白粉つけて紅さして、一時を胡魔化さうとする勇氣も出ず、強烈なる權威に打たれては、また如何ともすること能はず、狂氣の如く自己の肖像に一刀をあげせんとして、却つて自己の胸に怨の刃を加へたのであります。是れ恰も淨玻璃鏡の前に立たせられた時であります。私共嚴正なる倫理の前には、自殺するの外はない。

あゝ此時、彼にして若しすべての罪惡を許容し、叱るに非ずして共に泣き責むるにあらざして共に咽び、これが爲めにとて起したる本願ぞ、怖れざれば安らかなれ一切の恐懼をして大安ならしむる我茲にありと、共に泣き共に咽ぶ大悲の親を、自己の上に眺め認めしならば、彼はそこに永遠の生命を得た

であらう。新あたしき人ひととなつて新あたしき生せい活くわつに入いつたであらう。不ふ安あんと恐き怖ょうと
驚おど愕めいに引ひきかへて、安あん住ぢゆうと歡くわん喜ぎと感かん謝しゃとが、湧ゆう然ぜんとして彼かれの胸むねに起おこり來きたつた
であらうのに。